第 206 号　令和 6 年 7 月 23 日発行

中田かわら版　8 月号

～中田地区の地域活動をお知らせします～

発行：中田地区経営委員会　　協力：中田連合自治会　泉区役所
制作：中田かわら版制作編集委員会　　横浜市踊場地域ケアプラザ

■この人に会いたい＜75＞

「備えよつねに」「継続は力なり」

折り紙講師 16 年　平木 祺至世（きしよ）さん（83）中村町内会

「70 歳前からの手習いです」。――平成 20 年（2008 年）、初めて折り紙の楽しさ、魅力に惹かれると、もうこの道一直線。「日本折紙協会」の講師の資格を取得し、今度はその楽しさを教えることに生き甲斐を感じ 16 年続いている。現在、同協会の西横浜支部、支部長をやっている。中田コミュニテイハウスで月 3 回（初級・中級・講師の会）、「くずの」で月 1 回（中級）、踊場ケアプラザで 2 か月に 1 回、デイサービスの有志に指導をしている。「生徒さんは 60～80 代の高齢ですが、出来上ったときの喜びよう。何よりも楽しんでおられます。作品は必ず完成させて持ち帰れるよう気を付けています。上手い下手は関係なく楽しくやることが一番」と平木さん。指先と頭を使いボケ防止にも良い。仲間との交流で人生が豊かになり、自分にも勉強になるという。

■　■

平木さんは広島県呉市の生まれ。昭和 38 年、結婚（平木恒雄氏）を期に大田区（東京）に 2 年ほど住み、中田には昭和 40 年（1965 年）から。来年は 60 年になる。令和 5 年、家族などから祝福されダイアモンド婚も迎えた。3 人の子供にも恵まれ長女、次女、長男もいずれも 50 代で健在だ。ところで平木さんの真骨頂は子育ての頃からだ。子供たちの幼児時代は「御霊神社幼児園」に通園させている。長男が在籍の時「父母の会」の会長も務めた。このとき「保母」の資格をとる。子供が小学校に入学するころ、戸塚区に「ボーイスカウト」はあっても「ガールスカウト」がなかった。そこで有志と奔走して「ガールスカウト神奈川第 37 団」を発団、娘二人も高校生までスカウトとして活動、平木さんも一緒になって団のリーダーとして活動していた。この団は現在も続いている。その後、50 代では「民生・児童委員」を 3 期 9 年間勤めた。夫の恒雄氏もかつて地元のソフトボールの選手、監督を務め、ボランティア「ウエルネスいずみ」の会長を 20 年勤めるなど二人の地域活動での功績は大きい。

■　■

趣味では「戸塚刺繍」を 20 年。ここでも講師の資格を取り、毎年「横浜高島屋展示会」に出品してきた（今はやっていない）。「社交ダンス」歴 30 年は現在も継続中で週 2 回、渋谷まで通っている。「旅行」も 60 代はクルーズに興味を持ち夫婦で「飛鳥」で世界一周を 2 回、南極と北極にも行っている。自分の眼でいろいろな国を見聞すると「日本の良さを改めて感じる」という。人生 100 年時代。この先どこまで挑戦できるか楽しみ。
最後に私の好きな言葉はガールスカウトの教訓「備えよつねに」「継続は力なり」です。

（宮田貞夫）

記事にある情報をより詳しく知りたい方は、踊場地域ケアプラザ　嶋（しま）まで問い合わせください。
TEL　801-2114　FAX　801-2923

中田地区社会福祉協議会が「不登校」をテーマに研修会

講師、一般社団法人「かけはし」代表 廣瀬貴樹さん

６月８日（土）中田町会館にて中田地区社会福祉協議会主催、中田連合女性部共催にて研修が開催された。「子どもたちを取り巻く生きづらさ～不登校から見える今と求められる理解と居場所～」という内容で講師として、一般社団法人「かけはし」代表廣瀬貴樹さんが登壇され、中田地区の活動紹介として「おとむすび」「そらいろ」が参加「宮ノ前テラス」の紹介もされた。
今回は、講演をされた廣瀬さんのメッセージを掲載させていただく。

不登校の子どもと社会のかけはしになりたい

私は約３年前に横浜市小学校教員を退職し、同じく妻も小学校教員を退職し、二人で、横浜市泉区で居場所づくりを始めました。

小学校教員として子どもたちと向き合う中で、教室の中で繰り広げられる日々は、毎日がドラマのようで、言葉にならない喜びの中で、一生懸命にこどもたちと向き合いながら全力疾走する毎日でした。

そんな日々で、私の中には年々、様々な葛藤が生まれてきました。クラスの中には毎年気になる子がいて、その子一人ひとりには様々な背景がありました。学校や家庭での出来事、学習や人間関係での困難さなど、一人ひとりと真剣に向き合う中で見えてきた一人ひとりの「生きづらさ」には、本当にはかり知れない“苦しさ”がありました。

その子の中でどうにもできない現実がある。その子のせいで、様々な生きづらさを抱えているわけでない。そして社会全体が、今のこどもたちの生きづらさをつくっている。私は、教員という学校の枠を超えて、子どもたち一人ひとりの生きづらさにとことん寄り添うことができることを生涯の仕事としてするために、「居場所づくり」をやると決めました。

私たちが居場所づくりにおいて大事にした理念は、「土になりたい」でした。一人ひとりにはその子らしさ、素晴らしい個性と可能性をもっている。だからこそ私たちは、その一人ひとりの個性や可能性を信じぬき、その子らしく伸びていくことを支える土（環境）になりたいと思ったのです。そして一人ひとりの悩みや葛藤にとことん寄り添いたいと思っています。

居場所をはじめてから３年が過ぎ、居場所の中で不登校の子どもたちの表情がどんどん変わっていき、自分のことを話してくれたり、いろいろなことに挑戦したりする姿があります。しかし、居場所づくりを運営していくことは非常に厳しい現実もあります。

持続可能な運営になるよう全力で取り組み、これからも子どもたちが自分を好きになり、自分らしさを大切に、社会に羽ばたいていけるように、「かけはし」となり続けていく決意です。微力ながら全力で自分たちにできることを地道に行っていきます。

編集後記

「終戦記念日」。日本が敗れ戦争が終結した日である。しかし、敗戦で心を打ちひしがれた日本人に安堵感と、かすかな希望を与えてくれたのが「終戦」という言葉であった。
「終戦」、この言葉は「戦争は終わったのだ」「これから頑張るんだ」と励まし、人々を「前向きに生きよう」と奮起させ、驚異的な戦後の復興に大きな役割を果たしたと思う。
外国の絵本に「戦争に勝ち負けはない」「勝ったように見えてもどちらも戦争により失われたものが大きいから・・」とある。各地で争いが起きている。早く「終戦」という言葉を聞きたい。　　(田中　進)

◎発行：中田地区経営委員会「かわら版」制作編集委員会
委員長　宮田貞夫　　編集長　松本 正
編集委員；山木重樹、小島敏子、田中 進、河内満明、松本純子、鈴木賀津彦、嶋　宏之